

対象理解を深めるための在宅看護実習方法とその学習成果についての文献研究

蓮井貴子¹⁾ 菊地珠緒¹⁾ 西崎未和¹⁾

要 旨

在宅看護実習について、学生が対象理解を深めるための実習方法と学習成果について明らかにすることを目的として文献研究を行った。在宅看護論・在宅看護学・在宅看護実習をキーワードとして文献検索を行い、原著論文であり実習方法と学習成果が明示されているもののうち、学生が対象理解を深めることに焦点をあてた4件を対象とした。その結果、学生が療養者の具体的な生活を体験し、QOLについて考える機会を与えることで、療養者や家族の個々の生活や価値観を知り、生活を支えるという視点に立った看護を考えることができることが明らかにされていた。そして、複数の療養者を訪問するだけでなく、1人の療養者の援助について考えることでより深い対象理解ができることが示唆されていた。また、アセスメントツールを使用することは在宅看護実習の環境に不慣れな学生にとって看護過程を展開する際に見落としなく様々な視点から対象者を捉えるために有用な学習支援教材となることが明らかにされていた。

キーワード：在宅看護実習 対象理解 実習方法 学習成果

I. 緒言

平成18年の簡易生命表によると、わが国の平均寿命は男79.00歳、女85.81歳となり、平成18年10月1日現在の総人口に占める65歳以上の老年人口の割合は20.8%と高齢社会となっている。さらに、平成17年の患者調査によると、65歳以上が入院患者の6割、外来の4割を占め、高齢社会がわが国の医療費増加の一因となっている¹⁾。

このような状況に対応するために、厚生労働省は2006年4月から実施の医療制度改革の日玉として平均在院日数の短縮をはかることなどにより、医療の中心を「入院」から「在宅」へ転換することを掲げている。

在宅看護は、在宅医療や在宅介護とともに在宅ケアの一つとして位置づけられるものであり、昨今のわが国の社会情勢の中では在宅看護に対する社会的要請が増大しているといえる。

さまざまな健康問題を抱えながら在宅の場で生活をする療養者や家族を対象として行われる在宅看護は、その実践にあたって療養者や家族がそれぞれも

つ人生や生活に対する主体性や価値観を尊重しながら、健康維持・増進及びQOLの向上を目指すことが求められる。学生は在宅看護実習において、在宅で療養している療養者や家族の生活の場での看護を学ぶことになる。そして、対象である療養者を理解するためには、療養者のアセスメントだけではなく、療養者とその家族や居住環境、地域社会とのつながりなど広範囲なアセスメントが必要である。

そこで、在宅看護実習において、学生が対象理解を深めるための実習方法の工夫とその学習成果について明らかにするために文献研究を行った。

II. 研究方法

1. 研究期間

平成18年6月から平成19年8月

2. 研究対象

医学中央雑誌Web (Ver 4) をデータベースとし、「在宅看護論」、「在宅看護学」、「在宅看護実習」をキーワードとし文献検索を行った。検索範囲は保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則に在宅看護論が位置づけられた平成9年以降とした。その結

1) 川崎市立看護短期大学

果、60件が検索された（平成18年6月現在）。

その中から、①原著論文であること、②実習方法が明示されていること、③学習成果が明示されていること、④実習に関する文献であることとしたところ、27件が該当した。この27件を精読し、実習方法を一覧に整理し、学生が対象理解を深めることに焦点をあてた実習方法を展開していた4件を対象とした。

3. 用語の操作的定義

本研究における「対象理解」とは、在宅看護の対象である療養者とその家族を身体的、心理的、社会的、霊的側面から捉えることとした。

4. 分析方法

対象となった4件の論文について、実習方法とその学習成果に関して著者が記述している内容の意味を損ねないように要約し、一覧に整理した。また、これらの過程は共同研究者と検討しながら実施した。

III. 結果

対象となった4文献から得られた実習方法とその学習成果を表1に示した。

堀井ら²⁾の研究では、療養者の家庭に学生が単独で訪問し、日中の生活を療養者や家族とともに過ごす滞在実習が行われていた。そして、実習ワークシートから学生の学びを読み取りカテゴリ化したものが学習成果として示されていた。その結果、学生は日常的に繰り返される食事や排泄などの生活必需行動や、炊事や洗濯などの社会生活行動、訪問看護サービスの利用、趣味を楽しむなどの自由時間行動を体験することができていた。また、家族が行う介護や療養者自らが健康管理を行う行動も体験していた。そして、それらの体験から在宅療養により、これまでの生活様式や生活習慣が守られることを理解していた。また、滞在中にさまざまな訪問サービスの実際を見学し、その人らしさを尊重した生活をサポートする社会資源について理解を深めていた。また、障害を持つ子どもや療養者の生活の実際を通して障害を持ちながらも前向きに生活している療養者の生きる力を感じとっていたとともに、在宅療養が療養者と介護者の健康維持を目指すことであることも学んでいた。さらに、学生は介護者や家族の様子や言動から使命として受け止めた介護生活の中で見いだした介護者の自信と喜びについて理解し、それぞれ

が役割を持ち、安定を保ちながら生活している療養者と家族の実態を捉えていた。一方で、「療養者が介護者に対する不満の気持ちを隠していることを知る」等、低下している生活力と不満足な介護によって生じる療養者のジレンマを捉えていた。そして、「介護したい思いとは一致しない未熟な介護力」や「状態変化の危険性を持つ療養者の生活」等を知り、療養者と介護者の状態に連動する在宅療養継続の不安定さという、在宅療養のリスクについても学んでいた。

平尾ら³⁾の研究では受け持ち療養者のQOLを考慮した看護活動を意識した計画を立案できるよう、看護過程とは別に記録用紙を設け、QOLを考慮した看護を行う上での留意点とその理由を記載することを学生に課していた。そして、実習終了後の課題レポートに学生が記述したQOLを考慮した看護活動の内容についてカテゴリ化を行った結果、学生はその人らしいライフスタイルを尊重することがQOLを考慮する上で重要であると学んでいた。そして、療養者の主体性を尊重し、療養者に楽しみや意欲をもたらす看護の重要性についても学んでいた。また、療養者自身でできることを拡大していく看護が療養者のQOLのために重要であるということも理解していた。

波止ら⁴⁾の研究では、2週間の実習期間の中で、実習方法の異なる2ヶ所の訪問看護ステーションでの実習を各1週間ずつ行っていた。1つは複数の療養者宅を訪問する実習で、もう1つは1人の療養者を受け持ちヘンダーソンの看護論に基づいて援助内容を考える実習を行い、それぞれの訪問看護ステーションでの学習成果に関するアンケート調査が行われていた。その結果、複数の療養者を訪問する実習では「様々な疾患及び状態の人がいる」、「個々の生活習慣の違いが理解できた」等、在宅療養者の疾病や環境に関する一般的傾向を知ることができた。また、「高齢者が高齢者を介護している」等、在宅には様々な療養者や家族がいることが理解できた。一方、1人の療養者を受け持ち看護論に基づいて援助内容を考える実習では、療養者を生活者として捉えられていた。そして、療養者だけではなく家族や介護者のQOLを高める看護の重要性まで考えることができていた。

成瀬ら⁵⁾の研究では、学生が生活者の視点をもって対象者をアセスメントができるよう、学習支援ツールとして訪問看護振興財団のアセスメント・ケアプ

ランツールを使用する実習が行われていた。そして、実習終了後の学生のフォーカスグループディスカッションの内容と自己評価表の分析が行われていた。その結果、直接的な学習成果として、対象を捉える視点が広がり、学生がアセスメントの裏づけを得ることができていた。また、在宅看護実習の環境に慣れていない学生にとっての情報収集のガイダンスとなり、系統的な情報収集ができていた。さらに、副

次的な学習成果としては、現象と知識の統合力の必要性を学び、問題とニーズの違いにも気づくことができていた。そして、アセスメント・ケアプランツールの結果だけではなく、現実の対象をみることの大切さを学び、「変えようがない」と消極的に考えていた療養者の解決困難な問題に対しても「どうにか変えられる方法を考えてみよう」という意識に変化していた。

表1 対象理解を深めるための実習方法の工夫と学習の成果

著者名	実習方法の工夫	学習の成果 ()は学習成果の評価方法
堀井 直子他 在宅看護論実習における療養生活に関する学生の学び—療養者宅で過ごした体験を通して—	療養者の家庭を単独で訪問し療養者や家族の日常の生活を共に過ごす	〈「実習ワークシート」から読み取られた学生の学びのカテゴリ化〉 ・生活必需行動、社会生活行動、訪問看護サービスの利用、自由時間行動を体験することができた。 ・在宅療養で守られる今までの生活を理解していた。 ・その人らしさを守る社会資源を理解していた。 ・障害を持ちながら前向きに生活している療養者の生きる力を考える機会になっていた。 ・在宅療養が療養者と家族の健康維持を目指すことであると学んでいた。 ・使命として受け止めた介護生活の中で見いだした介護者の自信と喜びを学んでいた。 ・役割を持ち安定を保ちながら生活している療養者と家族を理解していた。 ・低下している生活力と不満足な介護によって生じるジレンマを学んでいた。 ・療養者と家族の状態に連動する在宅療養継続の不安定さを学んでいた。
平尾 恭子他 在宅看護実習におけるQOLを考慮した看護活動に関する学び	看護計画立案用紙とは別にQOLを考慮した看護の留意点を記載する	〈「課題レポート」に学生が記述したQOLを考慮した看護活動内容についてのカテゴリ化〉 ・その人らしいライフスタイルを尊重することの重要性について学んでいた。 ・療養者の主体性を尊重した看護の重要性について学んでいた。 ・療養者自身でできることを拡大していくことが重要な看護であると学んでいた。 ・療養者に楽しみや意欲をもたらす看護を行うことが重要であると学んでいた。
波止 千恵他 在宅看護論実習の指導内容・方法の検討—実習方法の異なる2ヶ所の訪問看護ステーションでの学びの分析から—	実習方法の異なる2つのステーションで1週間ずつ実習する ・1週間は、複数の療養者宅の訪問を行った ・1週間は、1人の療養者を受け持ちハンダーソンの看護論に基づいて援助内容を考えた	〈自由記載による学習成果に関するアンケート調査〉 (複数の療養者宅を訪問する実習) ・「様々な疾患及び状態の人がいる」、「個々の生活習慣の違いが理解できた」等、在宅療養者の疾病や環境に関する一般的傾向を知ることができた。 ・「高齢者が高齢者を介護している」等、在宅には様々な療養者や家族がいることが理解できた。 (1人の療養者宅を訪問する実習) ・療養者を在宅生活者として捉えることができていた。 ・家族、介護者のQOLを高める質的ケアの重要性まで考えることができた。
成瀬 和子他 在宅看護実習におけるケアアセスメントツール使用の有用性の検討	療養者のアセスメントに際し、日本訪問看護振興財団のアセスメント・ケアプランツールを使用する。	〈実習終了後の学生のフォーカスグループディスカッションの内容と実習の自己評価表の分析〉 ・対象を捉える視点が広がった。 ・判断の助けとなっていた。 ・系統的に情報収集ができていた。 ・現象と知識を統合することの必要性を学んでいた。 ・問題とニーズの違いについて気づいていた。 ・ツールの結果だけでなく現実の対象者を見ることの大切さを学んでいた。 ・解決困難な問題への取組みの意識が強化された。

IV. 考察

在宅看護の対象は生活者としての療養者や家族である。そして、療養者と家族の生活の中で看護が行われ、そこではその家の生活信条や価値観などあらゆる側面への配慮が必要である。今回、研究対象とした文献では、学生が在宅看護実習で生活者としての対象を理解するためのさまざまな実習方法が展開され、それに対する学習成果が述べられていた。学生が療養者宅を単独で訪問し、療養者や家族の日常の生活を共に過ごす実習では、学生が具体的な療養者の生活場面を目の当たりにすることで、その人の目線に立ち、個々の生活習慣や価値観、家族関係などについて感じ取ることができていることができていた。また、看護計画立案用紙とは別に、QOLを考慮した

看護について記載する用紙を課した実習では、学生が療養者や家族のそれぞれの価値観や生活習慣を知るとともに、生活の主体である療養者や家族が彼らの生活の仕方を決めていくことを尊重する看護を行うことでQOLを向上させることができると理解することができていた。これらのことから、学生が療養者の具体的な生活を体験し、また、「療養者のQOLを尊重することとは何か」を考える機会をあたえることで、生活者としての療養者や家族を感じとり、看護者として療養者や家族の生活を支えるという視点を養うことができると考えられた。

一方、「複数の療養者宅を訪問する」、「1人の療養者を受け持ち、看護論に基づいて援助内容を考える」という課題を1週間ずつ行った実習では、学生

は、複数の療養者を訪問することで個々の療養者の違いや生活習慣の違いや価値観を知り、さらに1人の療養者の援助内容を考えることで在宅療養者を生活者として捉え、家族を含めたQOLを高めるケアの重要性まで考えることができていた。このことから、在宅看護実習において学生が対象理解を深めるためには、多くの体験をさせるだけでなく、1人の療養者を受け持ち、看護論に基づいて援助を考えていくことで、身体状況のみならず、生活状況や家族状況などを深く分析することができ、それにより深い対象理解ができると考えられた。

また、在宅看護実習の場は短時間で見学中心の実習であり、1人の療養者に対する訪問の回数が限られていること、療養者宅を訪問する緊張感などから、施設内で実習してきた学生にとっては不慣れな環境である。そのため、学生が対象理解を深め、実習目的を達成するためには、学生が主体的に学習する姿勢が施設内での実習以上に求められることになる。このような課題を達成するために、アセスメントツールを用いた実習が展開されていた。そして、その学習成果としてアセスメントツールを使用することで学生が対象を捉える視点が広がり、情報収集やアセスメントを助けるなどの利点があったほか、学生の問題解決に対する姿勢にも変化をもたらしていた。アセスメントツールを使用することで、療養者の生活の場で学生自身では気づかない視点に気づくことができ、施設とは異なる療養者の環境や、「食事の用意」等の社会的な生活能力など、情報収集をする際に見落としがちな視点にも気づくことができる。アセスメントツールを使用することは、在宅看護の環

境に慣れていない学生が看護過程を展開する際の学習支援教材として、様々な視点から対象を捉えるために有用であると考えられた。しかし、アセスメントツールを活用するにあたっては学生が使いこなすことができるよう支援することが必要であるが、教員が学生と療養者の関わりの場面で直接指導をすることができないことも在宅看護実習の特性でもあることから、学生が看護過程を展開するにあたって、アセスメントや問題点の整理について実習指導者と十分な連携を図りながら支援を行っていくことも必要であると考えられた。

V. 結語

在宅看護実習について、文献をもとに学生が対象理解を深めるための実習方法とその学習成果について分析を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

- ・学生が療養者の具体的な生活を体験し、QOLについて考える機会を与えることで、療養者や家族の個々の生活や価値観を知り、生活を支えるという視点に立った看護を考えることができていた。
- ・複数の療養者宅を訪問するだけでなく、1人の療養者の援助について考えることでより深い対象理解ができることが示唆されていた。
- ・アセスメントツールを使用することは在宅看護実習の環境に不慣れな学生にとって看護過程を展開する際に見落としなく様々な視点から対象を捉えるために有用であることが明らかにされていた。

文献

- 1) 財団法人厚生統計協会. 国民衛生の動向2007. 厚生指標臨時増刊. 第54巻, 9号, p. 36-77.
- 2) 堀井直子, 新美綾子. 在宅看護論実習における療養生活に関する学生の学び, 療養者宅で過ごした体験を通して. 日本看護医療学会雑誌. 7巻, 1号, 2005, p. 45-56.
- 3) 平尾恭子, 山田和子, 熊谷幸恵他. 在宅看護実習におけるQOLを考慮した看護活動に関する学び. 和歌山県立医科大学保健看護学部紀要. 1巻, 2005, p. 71-78.
- 4) 波止千恵, 原田広枝, 岡崎美智子. 在宅看護論実習の指導内容・方法の検討, 実習方法の異なる2ヶ所の訪問看護ステーションでの学びの分析から. 九州厚生年金看護専門学校紀要. 1号, 2000, p. 45-50.
- 5) 成瀬和子, 長江弘子, 川越博美. 在宅看護実習におけるケアアセスメントツール使用の有用性の検討. 聖路加看護大学紀要. 27号, 2001, p. 59-63.